

アリアズナとの悲恋

広瀬武夫のその人格は外国人をも強く引きつけた。広瀬を心から愛した女性の一人が、コワリスキー大佐の娘アリアズナである。美貌の彼女に言い寄るロシアの若い海軍士官は少なくなかったが、彼女は異国の人たる広瀬に思慕の情を寄せていた。一家とつきあうようになって段々その思いは急速に深くなった。純粹で無垢、一面少年の如き心を宿し、酒も煙草もやらぬ、まじめな男は今まで女性とのつき合いは全く無かった。アリアズナは広瀬の正直さ、誠実さ、飾るところのない純朴さ、優しさ、そして男らしい剛毅さに強く心惹かれるのであった。まじめで道心堅固であったが、しかし武夫もアリアズナの慕情がひしひしと伝わった。たとえ異国の人間とはいえ、コワリスキーは立派な軍人だったし、その娘たるアリアズナは貴族の子女として申し分のない人柄と魅力具备了素晴らしい女性であった。広瀬もまた彼女を深く愛するようになった。

広瀬は彼女から愛をうちあけられた時、真剣に思い悩んだ。広瀬はこの時、兄勝比古の妻春江にこのような手紙を送っている、「かりに武夫が縁ありて碧眼金髪（へきがんきんぼつ）の児をご紹介する時があるなら、御義絶などと御憤慨遊ばれまじきや。その点につき、まず第一にお伺い申し上げたく存じます。実は武夫も当露国において、などと切り出したならば吃驚（きつきょう）の程度はいかがなものでしょうか」春江は驚いたが、その時は西洋館をたてて待っていますと答えている。広瀬にとって、彼女が戦うべき相手たるロシアの女性でなければ、どんなによかったことであろう。到底この恋は実らぬ恋であった。明治35年、約四年半のロシア生活を終えて帰国する時、アリアズナは別れを惜しんで声をあげて泣いた。広瀬も断腸の思いのなかで、日頃愛唱していたロシア詩人プーシキンの詩を自ら漢詩に訳し、万感を込めアリアズナに与えた。

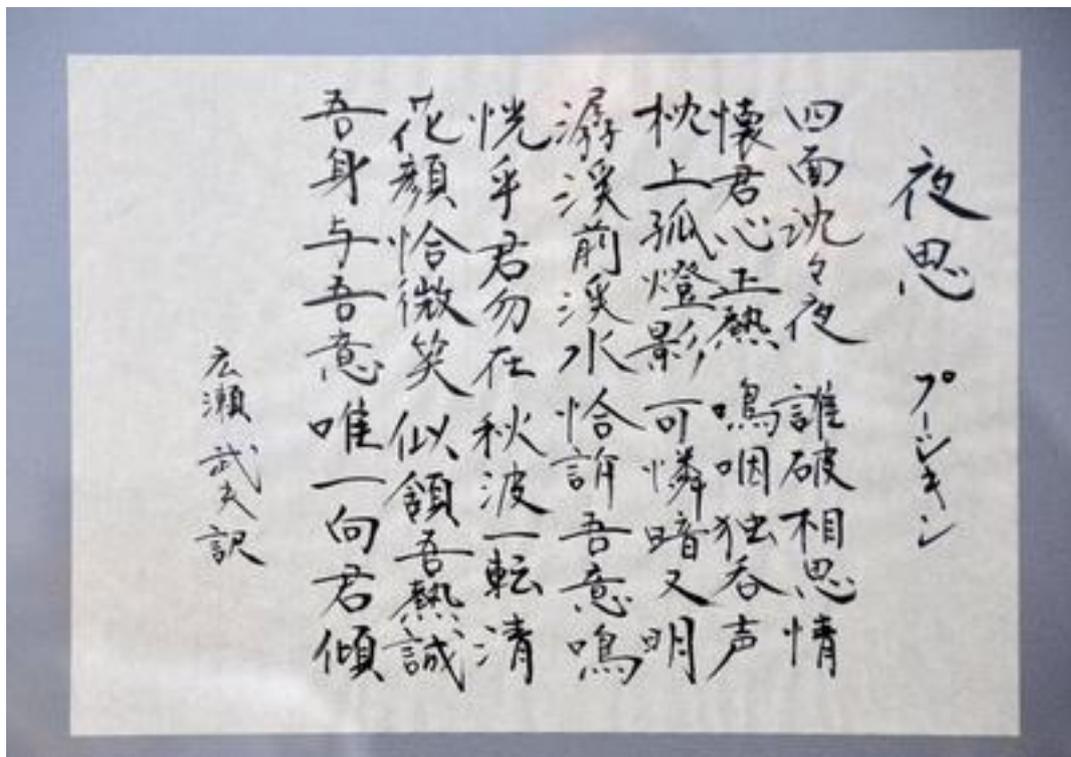
※ 夜 思 （やし）

四壁沈々の夜..... しへきちんちんのよ
 誰か破らん 相思の情..... だれかやぶらん そうしのじょう
 君を懐いて心は正に熱し... きみをいだいてころはまさにあつし
 嗚咽して独り声を吞む..... おえつしてひとりこえをのむ
 枕上 孤燈の影..... ちんじょう ことのかけ
 憐れむべし暗くまた明るし.. あわれむべしくらくまたあかるし
 潺湲たり 前溪の水..... せんかんだり ぜんけいのみず

恰も吾が意を訴えて鳴く... あたかもわがこころをうったえてなく
 恍として君 たちまち 在るがごとし... こうとしてきみ たちまちある
 が ごとし

秋波 一転して清し..... しゅうはいってんしてきよし
 花顔 恰も微笑して..... かがん あたかもびしょうして
 吾が熱誠に領けるに似たり.. わがねっせいになずけるににたり
 吾が身と我が意と..... わがみとわがこころと
 唯ひたすら君に向かいて傾く.. ただひたすらきみにむかいてかたむく
 武夫

四壁 (あたり、まわり)・ちんちん (夜がふけゆくさま)・枕上 (まくらもと)
 潺湲 (水がさらさら流れるさま)・前溪 (そばの谷川)
 秋波 (アリアズナの美しい目元)
 花顔 (アリアズナの美しい花のようなかんばせ)
 熱誠 (アリアズナを深く愛する真心)
 広瀬もまた、この別離に悲涙を流したのである。



<日露戦争>

滞露中に海軍少佐に進んだ広瀬は、明治35年3月に帰国後、最新鋭戦艦「朝日」の水雷長兼分隊長を命ぜられた。彼は親しい友人に対し漢詩と共に次なる便りを出している。「時局は私ども軍人を待つこと、切なるものがあります。平生養っていただいている国恩に報いる機会はこの際にありと、全力にて励んでおります。幸いにして私は頑健と心意気においては断じて人後には落ちません。まさに来たらんとする戦いの場において、武夫（ぶふ）の名を辱しむる等のことを、なさじと覚悟を決めております。」

「男兒報国、死何ぞ辞せん、廟算偏（びょうさんひとえ）に戦機を逸するを懼（おそ）る、日夕（につせき）空しく磨く遺恨の剣、あやまるなかれ千載一隅の時」... と。

対露戦に対する当時の日本海軍軍人達の志気を窺い知ることのできる手紙である。

明治37年2月10日の対ロシア宣戦布告時、広瀬は次の歌を詠んでいる。

「七八度、生まれかわりて敷島の日本男兒の義務尽くさん。皇御国に生まれきて、吾真心を君に尽さん。」

<旅順口閉塞作戦>

東郷平八郎を司令長官とする連合艦隊はロシア太平洋艦隊との決戦を求めたが、ロシアはそれを避け、旅順港内から出てこようとはしなかった。そこで行われたのが、有名な旅順口閉塞作戦である。旅順港の出入り口は300メートルと狭く、戦艦等の大型船の可能通路幅はさらに狭い。ここに古い商船を沈め、敵艦隊を港内に封じ込む作戦で、提案者は連合艦隊参謀の有馬良橘（ありましようきつ）中佐であった。有馬は自ら実施する決意で同志を求め、有馬を含む5人の指揮官、5隻の商船と2千名の志願者の内より60名の下士官と兵士が選ばれた。広瀬も有馬に誘われ、決然と参加した。日本海海戦の内容は以前の勉強会で述べているので省略する。

広瀬はこの時、最愛のエリアズナに最後の手紙を書いている。内容は次の如きである。「私は本日、重大任務を帯び、戦線への途上にあります。祖国を守る為、私は死を賭しても、この任務を遂行しなければなりません。匆忙（そうぼう＝あわただしいこと）の間に私が愛する貴女へ認（したた）めたこの手紙

が、貴女の手元に届く頃は両国の国交が再び旧に復しているでしょう。どうかお元気で」

この手紙は平和回復後、アリアズナのもとに届けられた。広瀬は己の死を予言する如き詩を第一回閉塞作戦実施前に詠んでいる。

「丹心、国に報ぜん、一死何ぞ辞せん、船と与に骨を埋めん、旅順の睡（ほとり）」... と。

2月23日の夕方、閉塞隊が出発する時、広瀬は乗っている報国丸の側面に幕を張り、ロシア語をもってペンキでこう書いた。

「私は日本の広瀬武夫なり。今、乗りて貴軍港を閉塞す。しかしこれ唯その第一回のみ。今後幾度来るやも知れず」..... 一回目は失敗に終わる。

<再び旅順へ>

閉塞作戦は陸上砲台からの砲弾が、雨あられの如く降り注ぐため、出入り口近くまでは近づいたものの、それ以上進むことは不可能であった。東郷は再び同作戦を命じ、総指揮官の有馬中佐、各船指揮官は同じだったが、下士官と兵は全部入れかえた。第二回目も数千名の人々が志願したが50余名が選ばれた。広瀬は兄勝比古に「天佑を確信し、再び閉塞隊として福井丸に上らんとす。武士として、決して家声を汚すことなきを自信す。七生報国、一死心堅し、再び成功を期し、笑みを含みて船に上がる。御叱正乞う。いよいよ御武運の長久を祈る。再拝」という手紙を送っている。広瀬の家は吉野朝の忠臣、菊池氏より出ている。故に菊池の血脈を受け継いで在ることを誇りとし、「七生報国」こそ生涯の誓いであったようだ。西郷南洲も菊池の出である。

<杉野はいずこ>

3月26日の閉塞作戦実施前に前回同様冷水にて身を浄め、下着をあらため香をたき込めて出陣した。広瀬の福井丸は、総指揮官有馬中佐の千代丸の後に続いた。27日午前3時過ぎ旅順口に忍び寄る、だが今回も探照燈につかまり、十字砲火を浴びる。探照燈の強烈な光を受け方向を見失いながらも、猛烈な砲火のもとをかいくぐり、左転・右転を繰り返しながら出来る限り旅順口出入口に接近した。まず先頭に進む有馬少佐の千代丸が爆沈した。広瀬の福井丸

はその左側に錨を投げんとした時、敵駆逐艦の放った水雷が命中、福井丸が沈み始めた。広瀬は直ちに部下を短艇に移さんとして人員を点検したが、一人、杉野孫七一等兵曹だけが居ない。そこで皆、「杉野、杉野」「一等兵曹、一等兵曹」と大声で叫びつつ探し回った。広瀬はふり注ぐ弾丸の中、三たび船内を隈なく探したがついに見つからず、やむなく全員を短艇に移した上、福井丸を爆沈せしめた。短艇の兵士達は必死に櫂（かい）を漕いで敵から離れつつあった、その時、二人の部下が敵弾に倒れた。そのすぐ後、広瀬は飛び来たれる敵弾を頭部に受けて、一瞬のうちに海中に吹き飛ばされ、壮烈な戦死をとげるのである。彼の死は、あらゆる人々から惜しまれた。



広瀬武夫の様子を描いた画

東郷連合艦隊司令長官は大本営への報告の中で「中佐（戦死の前日、中佐に昇進）は平時に於いても常に軍人の亀鑑たるのみならず。その最後に於いても万世不滅の好鑑を残せるものというべし」と述べている。広瀬の親友の一人に秋山真之がいる。秋山は海軍兵学校で二級下だったが年齢は同じである。海軍きっての名参謀であった秋山は、天才肌で自負心が強く、他の秀才達も眼中になかったが、一人広瀬だけには深い敬愛の念を持っていた。それは頭脳と才腕とは別の、広瀬の軍人、人間としての立派さに心服し、この親友の死を心から惜しんでいたと言われている。

この閉塞作戦は、指揮官もすべて入れ替え、仲間の林三子雄（三子夫）中佐が総指揮官となって、三度目を実行しているが、林中佐始め多くの犠牲者をだ

し、失敗している。しかし決して無益の作戦ではなかった。日本海軍の烈々たる闘魂に欧米諸国は驚嘆し、もしかしたら日本が勝つかも知れぬとの思いが強まり、以後日本の公債買入等に、非常に協力的となった。また三度に及ぶ閉塞作戦がロシアに与えた精神的打撃は大きかった。広瀬がペンキで大書した如く何度もやってくるに違いない。

このままでは太平洋艦隊は袋のネズミで、生ける屍となる恐れがあると。そこで彼等は旅順港を脱出し、封鎖の恐れのないウラジオストック行きを決意するのである。その結果、八月の黄海海戦となり、連合艦隊は太平洋艦隊にほぼ壊滅的打撃を与えることに成功する。一見失敗と思われるが日露戦争全体より、また特に日本海海戦から見ると最終的勝利をもたらす礎となり、大きな貢献をしたと言える。それ故、広瀬はその立派な人格と相まって死後海軍ではただ一人の軍神と称えられるに至ったのである。「広瀬中佐の歌」も作られ、明治・大正・昭和前期、国民唱歌として広く愛唱されたのは彼の人格の故であろう。

<マリヤ・ペテルセンの愛惜>

広瀬の死が報じられた時、最も悲しんだのは肉親の他、八代や秋山ら、親友とアリアズナであったろうが、ロシアにはもう一人その死を愛惜した女性があった。それは広瀬が親しく交ったペテルセン家の娘マリヤであった。彼女は明治38年一月、広瀬の兄嫁、春江に次の如きお悔やみの手紙を出した。

「尊敬する奥様、貴女にお手紙を差し上げることは長い間、私の願いでございました。それも只ひとえに、かけがえの無いお方が幽明境（ゆうめいさかい）を異にされまして、沈痛な嘆きに沈んでいらっしゃる貴女様を、私共が本当に心から御同情を込めて、お慰み申し上げておりますことを、お伝えしたかった故にございます。弟御の武夫様の御逝去は私共にとりましても、大きな喪失でございました。私共は貴女様と共に深い悲しみに沈んでおります。あの方は私共にとって決して忘れることのできない懐かしい誠実なお友達でしたから。あの方の思い出から私共の心の中に不断に生き続けることでありましょう。私共は、あの方の情深く、誠実な心を決して忘れることはございません。あの方は本当に偉大で、高貴な、類い稀なお方でした。私はあの方のことを考えます度に、いつも熱い心からの友情と、正真正銘の驚嘆の念とを感じたものでございました。そうして私達が、あの様に親しくお付き合い致していたしましたことは、私の生涯の最も懐かしい思い出の一つであろうと常に考えておりま

す。御承知の事かと存じますが、奥様、武夫様は殆ど私共の家族の一員だったのでございます。そして御自身でも確かに私共の家を居心地よく感じていらっしゃいました。クリスマスや新年の休暇の間、私共はあの方の思い出と、そのお姿とを胸に甦らせてはまた新たな悲しみに耽ったのでございます。そうした日々には、いつも、あの方は私共の一番大切なお客様でありましたし、あの方の誠実な友情とは殆ど子供のような人なつつこいお喜びの様子を見ては、私共も本当に嬉しくなってしまうものでございます。

それに増しても、恐らくご家族の方々にとって唯一の慰めとなるのは、あの方が御自身からお望みになっていた通り、ご立派な最期をお遂げになさったということでございましょう。あの方は愛する尊い祖国の為、英雄として行かれました。そしてあの方の思い出は永遠の歴史の中に、御家族の心の中に、また多くの友の心の中に生き続けてゆくこととございましょう。

それでは奥様、どうか私の御挨拶をお受け下さい。そしてお嬢様に呉々も宜敷くお伝え下さいますようお願い致します。お嬢様の事は『私共の忘れることのできぬお友達』が繰返し私共に語って下さいましたものですから。深き敬意をもって。マリヤ・ペテルセン」..... と。

広瀬の戦死の報はロシア側にもすぐ伝わったが、ペテルセン家の人々は皆悲しみに胸をつぶし、彼を深く思慕していたマリヤは何日も泣き続けたと伝わっている。広瀬を兄の如く慕っていた弟のオスカルも声をあげて泣いた。広瀬武夫という純真で天使のような美しい心根の持主が、如何に異国の人々の心を打って止まなかったかが理解できる。「情深く、誠実な心」の持主の広瀬を「本当に偉大で高貴な、たぐい稀なお方」と仰ぎ見、「尊い祖国の為」に死んだ「英雄」と称して止まぬマリヤ・ペテルセンのこの言葉こそ、広瀬の死に対する至上の弔詞であろう。そしてペテルセンの弔詞は現在の物質文明に毒された日本人の、最も必要な精神的感性ではなからうか。

<小生が少年時代から憧れ、学ばなかった人物像>

私はマリヤの弔詞に込められた、当時の汚れなき心から出る、精神的感性や広瀬武夫の純真性を薄き己に対する自戒の念から、広瀬武夫伝は、彼の精神性の必要性を自分にも訴えたく、どうしても書きたかったのである。彼は正に日本男児の典型と言えるだろう。広瀬の親友の一人、後の東京帝大総長となる、小野塚喜平治は広瀬につき「人を知るは初見にありというが、その容貌は凜として卓絶し、一見好個（すぐれていること）の軍人たるを知らるる上に、その言語挙動の淡泊にして快活なるは、いながらに私をして敬慕の念を生ぜしめたのである。彼は無類の勤勉家で、且つ無比の仁者であった。彼は私に語っ

た。『僕は朝日に乗組んでからも、自分の初志を貫徹するつもりであるから、必ず人一倍の労役に服する了簡である。他人は物好きな様に思うかも知れぬが、他人の毀誉などはかまわぬがよいよ。僕は甲板を洗う時などは、靴を去り雑巾を握って水兵に先立って拭きもする。ほうきをとって掃除もする。人を使役するという事は、我れ自身を使役することなどで、足も運ばず、手も働かさずに自分の思う通りの事をさせようと思うのは、到底できるはずのものではないからね。それに僕は艦中の者は皆一家族と思うているから、下の者ばかりに苦勞をかける気にはなれぬ』この心、この挙動、もって、万人の模範とすべきであります」また「飾り気のない、いつも天真爛漫な動作は彼の国人の賛美するところとなって、君が交際を結んだ人々は皆君を愛慕して、その家族なども深く君を信賴したのも実に君の美德を証明して余りあります」

その他小野塚総長は、特別の宗教心は聞かなかったが、常に安心立命を得て、その覚悟は到底常人の窺い知ることができない。身を持することの堅固なる、およそ軍人としては珍しい程、品行方正で衛生を重んじ攝養（せつよう）を務むること余りあり、軍人はその身を大切に、一朝有事の場合に及んで良くその本分を尽くさねばならぬと私に語ったが、誠に広瀬君が本日ある所以（ゆえん）である。また部下の生命を惜しむあまり、弾丸雨飛の危険を冒して今やまさに沈没せんとする閉塞船内を三度まで限なく歩いて、これを搜索した、その勇敢にして、かつ仁慈なる行為はあらゆる人類社会より満幅の同情を集め得べきは当然のことであって真に万世不滅の好鑑を残されたものであろう……と。私（小野塚）をして一言もって広瀬君を評せしむれば、広瀬君は崇高なる義務心に満てる玲瓏（れいろう＝美しく光り輝くこと）、玉の如き快男子なりと評したい。

小生が思うのは、広瀬生涯の信念は「天地を動かし、鬼神を感じしむる唯、誠なるのみ」……と。気高く、剛毅で、素朴な美しい人間性をもつ花も実もある武人中の武人、男の中の男が広瀬武夫であり、日本男児の典型にほかならない。

小生も近づきたい男の像である。

平成29年4月30日

志雲会塾長 有馬正能